

夕陽あかあかと落葉松林に照れる時ながくは鳴かぬ春蟬のこゑ
 小夜更けを地震に目ざめてふとも聴くむさびの聲は谿を越えつる
 海ゆ昇る陽の明るさよ昨夜ひと夜雷は鳴りしが梅雨あくらし
 十四五の少女の唇に紅そめて暗きに恥じり客にも言ふ（巷）
 これがめらは生活の爲に媚賣りて己れ醜く馴れゆくらしも
 磯砂を踏めばにじみ來水音のすがすがしもよ朝日を浴びにつつ

叙景雜原不退

やはらかにたそがれそめし山並のみ雪の映へは愛しかりけり
 なよなよとうすくれなひの花ゆらぐ合歡の梢に夕あかりして
 あかねさす深草百合の山かげにひかげこもりてひぐらしのなく
 窓下のにびひろごりしかんぼちやのかたちとゝのひしもの七八つも見ゆ
 夕ざれば生き咲きそふ白粉の花の紅ひ美しみ見つ
 種熟れしこれが大き向日葵に轟たのしげに來鳴きつればむ
 雲ひくゝ霧の如にながれゆく山がひの街のあかつきよろしも
 きり小雨降りふかみつつまのかぎりおぼろけぶりて木立見へずも
 さらさらと又さらさらと群れて舞ふ落葉かなしも秋の風吹く
 ゆかしくもこれが賤家の軒にして菊咲きさけり大きな花して

御廟所

とほつ世に大きひじりの住みませしみあとおろがむ胸はせまりつ

致します。その時こそこの御經に書いてある様に一切の欲惡煩惱を捨て去つて佛の使となり命を捨て、衆生濟度に盡しませう。馬鹿たつた故に犯した此の世の罪を何率許して下さい。」と私は心の底から後悔するのであつた。

思へば昭和三年の春四月已來跣足詣りの願を起してから丁度滿三年目、今日こそ大願成就の日である。母の子に對する心、それを思ふと胸がはりさけるやうだつた。「さうだ此の年老いた父母の爲に斷じて死んではならぬ。それに今日は四月八日だ。」私は腹の底から湧き起る不思議な大勇猛心をむら／＼と感じた。病何者ぞ！私は床を蹴つて起きた。恐らくその時であつたらう。永年私を苦しめた病魔が朝霧の如く消失せたのは。

一切の魔を破して天晴地明、見る森羅万象盡く如來の慈光に浴して和氣溢れ、世は皆希望に燃えて居る。かくて後、病も癒えて私は父母の許しを得て髪を剃り佛弟子となり、今は身延の聖地にあつてありし日の先哲の死身弘法の尊き御生涯

さゝがにの糸玉つらぬみ庵のありしむかしを慕ひおろがむ
たへだへにつたふ懸樋に水波みつみさはにせりつむひじりとほとし
夜もすがら要文誦持の聲たへぬとほきみ世こそ慕はしきかな
ぬかすけば胸ちにせまるちからありみたまは今もこゝにいませり

戦傷の弟に

なりたちし醜のみ盾のいたつきに哀れ伏すてふ吾れかはらめや
すめらぎの防人汝れの今にして白妙の姿おろがむ吾れは
大君にささげし生命ながらへて白妙につゝむ赤きこゝろを

野菊

母そばの母めでませし一本のま白き野菊はこゝに咲けるに
ま白なる野菊手折りてとみこうみ心しめやかに母を慕へり

俳句

若葉明るう雨過ぎてゆく山の晝
花菖蒲朝をきほひて鯉の群
團扇つかふ音のみに更けて床の暗
蠶の匂ひこもりて峽の村十戸
明けて行く堂うそさむし燭のゆれ
谿に架す長き廊下や夕紅葉

嫩葉子

黒宮教文

をしのびつゝ行に學に一意精進を續けて居るものである。それにしても思ひ起すもの、眼に日夜浮び来るものは父母の姿である。川上川の上流風光清き處、日親上人血染の寶塔、清正公槍先の題目の靈蹟地寶塔山の拜殿正面に喜びの涙拭ひつゝ我が母が報恩感謝の赤誠こめて寄進した一尺五寸の大馨子、その銘に曰く、
「豚兒儀、陸軍士官學校在學中胃下垂症を患ひ、その後更に肺結核、肋膜炎、腹膜炎、脊髓カリエスを患ひ病床に呻吟する事三ヶ年その間死に直面する事前後九回、時に昭和三年四月八日斷然身命を捨て、法華經を信仰し三年跣足詣りの大願を立て神佛の加護を乞ひ奉りしに一念感應ましませしか大願成就の日病魔忽ち退散したるを以つて謝恩の爲馨子一個寄進し奉るもの也
昭和六年四月四日 施主小林みつ子 寶塔山主寶藏寺學進代」
母は死すとも寶塔山の聲の名の存する限り母の愛は永へに世に輝くであらう。

— 完 —